古代から中世にかけての考古学

―甲斐型土器生産をめぐって―

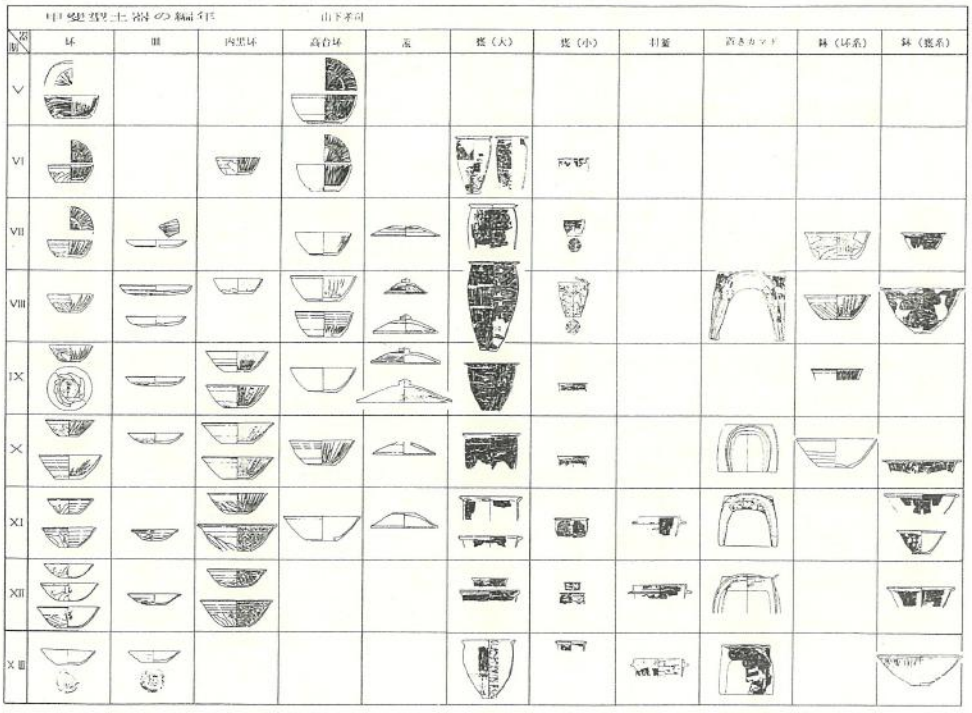
平野　修

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．甲斐型土器生産の状況
Ⅲ．須恵器生産と黒色土器生産の状況
Ⅳ．遺跡にみる土器焼成遺構
Ⅴ．甲斐型土器生産の特質
Ⅵ．甲斐型土器終焉期の動向
Ⅶ．甲斐型土器終焉の背景
Ⅷ．おわりに

Ⅰ．はじめに

関東を中心に東日本では、8世紀から10世紀にかけて、旧国単位で地域性に富んだ土師器の生産が行われている。それらは、「甲斐型」「武蔵型」「相模型」「駿東型」などとよばれている固有の土器群で、その出現の歴史的背景や経過は、各地域ごとによって異なっている。それら土器群の生産は、須恵器や黒色土器、灰釉陶器と密接な関係があり、窯業全体の流れのなかで捉えなければならない。

さて、ここで筆者に課せられたテーマは、古代から中世にかけての考古学研究を総括し、新たな視点や問題点の抽出を行ったうえで、当研究を今後どのように発展させるべきかを問うということである。こうした移行期に関わる問題は、「古代とは何か、中世とは何か」といった問題にも関わってくるもので、それは当該期の歴史研究に携わる者にとって、永遠の課題といっても過言ではない。しかしながら筆者の力量不足から、こうした問題に深く立ち入ることは困難といわざるを得ず、今回は、筆者の住む山梨県の固有な土器である「甲斐型土器」に着目し、その出現から終焉までの生産における時間的推移のなかでの、製作状況の変化や生産構造の変化を、先学の研究成果によって捉え、甲斐型土器生産の特質や、土器生産終焉にかかる社会的背景などを考察し、古代から中世にかかる社会状況の変化を追究してみたい。



第１図　甲斐型土器の編年（山下孝司氏作成、註2)の文献より転載）

II．甲斐型土器生産の状況

では、古代甲斐国における土器生産の状況をみてみよう。神奈川考古同人会主催による1983年のシンポジウム（以下、83年シンポと称す）において、Ｉ期からXV期までの編年案が坂本美夫氏らによって提示された[1]（以下、甲斐編年と称す）。甲斐編年のVI期からXII期までが、甲斐型土器が存在する時期である。83年シンポにおいては、甲斐型土器のうちで坏の成立年代については８世紀末とされてきたが、当該期の資料増加に伴う近年の研究成果では、その成立年代が若干遡り、甲斐国分寺造営との関わりを重視して、８世紀中葉段階とする説が有力視されている[2]。成立年代の引き上げに伴い、各期の年代も少しずつ遡る結果となっており、従前の編年観とは異なってきていることを最初に断っておきたい。

さて、甲斐型土器は、近年の研究から、その器形の種類においても多種多様であることがわかってきている。坏、高台坏、皿、蓋、鉢[3]、甕、羽釜、置き竈、坏の器形および整形技法をもつ黒色土器など多岐にわたっている。このなかで、甲斐型土器の出現から終焉まで中心的な位置を占める坏は、山下孝司氏の分析成果では[4]、第Ｉ期から第VIII期までの法量的・形態的変化とともに製作技法の変化が捉えられており、これは83年シンポにおける坂

本氏の研究成果を追認するかたちとなっている。以下、甲斐型土器を中心とする生産の展開を山下氏の段階設定に沿ってみていきたい。

第Ⅰ期（8世紀第3四半期段階）

本期は甲斐編年のⅤ期にあたり、基本的な器形の種類は坏と高台坏のみで、甲斐型坏成立期の直前段階にあたる。これらの土器には、盤状あるいは箱形の形態を呈し、ヘラミガキや暗文を施すといった甲斐型坏の特徴的な製作技法のいずれかの要素を含んでおり、土器群が韮崎市上本田遺跡や都留市堀之内原遺跡などでみられ、甲斐型坏に受け継がれる諸要素はすでに8世紀初頭段階に備えていたといえる。

第Ⅱ期（8世紀第4四半期段階）

本期は甲斐編年のⅥ期にあたり、甲斐型坏の成立期にあたる。製作技法など統一的な規格のもとに生産され、見た目にも美しく高級容器を指向しているようである。坏の他に高台坏や甕もみられ、また器体部内面を黒色処理した黒色土器もわずかだがみられる。本期を境として、甲斐国内一円に普及し始める。

第Ⅲ期（9世紀第1四半期段階）

本期は甲斐編年のⅦ期にあたる。坏は器体部外面のヘラミガキが消滅し、ヘラケズリのみとなる。確実性には乏しいがこの段階から皿、蓋、鉢などの他器形も、わずかながらみられる。

第Ⅳ期（9世紀第2四半期段階）

本期は甲斐編年のⅧ期にあたる。この段階で皿が確実に出現する。口径が15㎝前後とかなり大形で、口縁部が内外面に明確な稜をもって屈曲し、短く立ち上がる器形で、器体部および底部の整形は坏とは異なる回転ヘラケズリのものがほとんどである。器体部内面には放射状暗文ないし渦巻状暗文を施す。他の器形では、蓋、鉢（坏系・甕系両者とも）、置きカマド、坏の器形および整形技法をもつ黒色土器などの器形・種類が加わり、先に挙げた羽釜を除く器形のほとんどが当該期で出揃うことになる。そしてこの段階で甲斐型土器は、甲斐国内で普遍的な存在となっている。

第Ⅴ期（9世紀第3四半期段階）

本期は甲斐編年のⅨ期にあたる。器形の種類や各器形の基本的な成形方法などの変化はみられない。ただ本期に入り、坏の製作技法をもつ黒色土器が積極的な生産の展開を示し始める。束状やラセン状の暗文をみこみ部から器体部内面に多用し、高級容器を指向したのか、他の器形とはその趣をやや異にする。

第Ⅵ期（9世紀第4四半期段階）

本期は甲斐編年のⅩ期にあたる。各器形ごとに若干の形態的・技法的に変化を示すものの、その構成は前段階を踏襲するかたちで推移している。

第Ⅶ期（10世紀第1四半期段階）

本期は甲斐編年のⅪ期にあたる。本期において形態的、技法的に変化を示す器形が多く、新たに羽釜も加わるが、坏系の鉢は本期ではみられなくなる。まず坏は、口唇部形態が肥厚化し玉縁状を呈するようになる。そして器体部内面の暗文が完全に消滅し、底径の縮小化がさらに進む。口径が11㎝前後のものと、13㎝前後ものとの大小二種類に分化する傾向がみられる。皿の整形技法の変化は特に顕著である。器体部は回転ヘラケズリ調整だったものが、ヘラケズリ調整するものが主体的となり、坏の整形方法と同じ手法をとる。形態的にも坏の小形のものと見分けがつきにくくなっている。甕や甕系鉢は、口縁部形態が肥厚化し厚口縁型を呈し、前段階までの薄口縁型とは、際立った違いをみせる。

第Ⅷ期（10世紀第2四半期段階）

本期は甲斐編年のⅫ期にあたる。本期になり、高台坏および蓋が器形の構成のなかから消滅する。各器形ごと形態的にも技法的にも前段階を踏襲しているが、坏については、前段階で法量的に大小二種類の分化がみられたが、当該期ではさらに大中小三種類の法量分化がみられようになる。甕は口縁部形態の変化がさらに進み、末広口縁型のものが現れる。甕は、Ⅶ期までは比較的端正なつくりであったが、本期に入り、口縁をつくる作業工程を半ば簡略化するなど、つくり全体が粗雑になっている。こうした流れは甕だけではなく、坏や皿など他の器形でもみられる。

第Ⅸ期（10世紀第3～4四半期段階）

本期は甲斐編年のⅫ期にあたる。山下氏の分析では本期は設定されていない。本期は甲斐型土器の終焉とされている時期で、この段階で黒色土器はみられなくなり、他の器形も甲斐型土器のイメージは若干残しつつも、粗雑なつくりのものが多く、整形技法など多くの面でそのイメージが失われている。

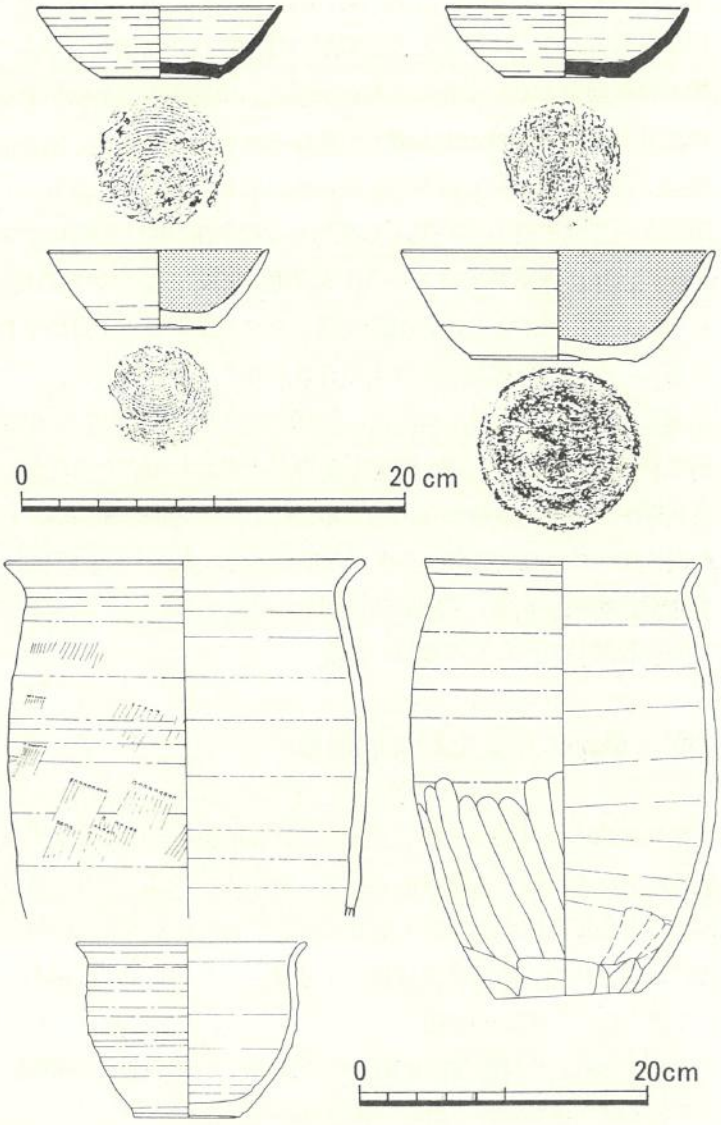
以上が、約2世紀の長きにわたって生産されてきた、甲斐型土器の各器形の消長を中心とした流れである。

Ⅲ．須恵器生産と黒色土器生産の状況

次に、甲斐型土器以外の須恵器と黒色土器における生産の状況についてみておこう。古墳時代以降、甲斐国の須恵器生産は、国内に広範な窯址群が形成されていない。こうした状況は、隣国の相模国でも同じであるが、甲斐国内では、わずかに数基の窯址が確認されているにすぎない。詳しい分布のあり方も、十分に把握されておらず、甲斐国内における須恵器生産のあり方や流通などといった問題も未解明のままとなっているのが現状である。

先の第Ⅰ期から第Ⅲ期段階（8世紀半ば～9世紀初頭）の住居跡では、須恵器製品の出

土率が、土師器を上回ることが多い。こうした須恵器の大半は、甲斐国外から搬入されたものと思われるが、搬入品とは明らかに胎土などが異なる須恵器も存在することから、集落の近辺に窯址が存在すると考えざるを得ない。甲斐国内でも当該期に、ある程度須恵器の生産を行っていたことは窺える。第Ⅳ期段階になると、須恵器に対する土師器の出土率が、同率もしくはそれ以上を示すようになり、第Ⅴ期段階では、須恵器の出土量は激減する。そしてⅥ期段階を境として、須恵器はほとんど姿を消し、須恵器は甕や壷の貯蔵具が、若干残る程度となる。須恵器に代わって登場するのが灰釉陶器である。



第２図　大小久保遺跡出土須恵器・黒色土器・ロクロ整形土師器甕

また、第Ⅳ期段階から甲斐型土器とは異なる製作技法をもつ黒色土器が出現し、甲斐型土器生産が終焉を迎える第Ⅸ期段階まで存続する。第Ⅳ期以前にも、同様な黒色土器が、韮崎市宮ノ前遺跡などで出土しているが、その量はわずかであり、実態はわかっていない。須恵器の消滅とともに出現することから、須恵器を補完する土器として捉えることができるだろう。

その製作技法は、須恵器と酷似しており、回転台を利用し、底部の切り離しは、回転糸

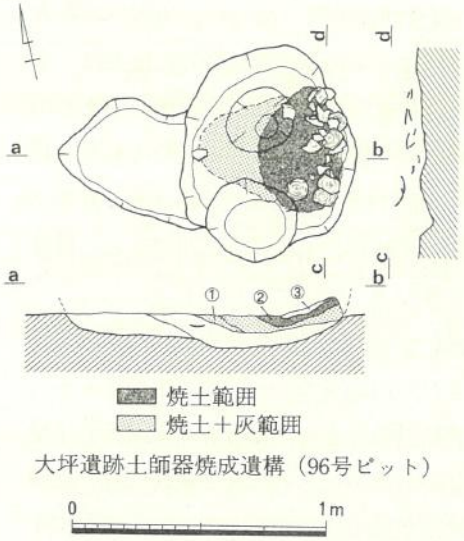
切り未調整のものが多い。酸化炎焼成で、褐色に近い色調を呈する。黒色処理は内面のみに施されるものが大半である。器形の種類には坏・椀・皿があり、椀・皿は灰釉陶器を模倣した形態をとる。こうした黒色土器は、甲斐国内でも旧巨麻郡域を中心に分布する傾向にあり、遺跡からの出土も概して客体的な存在であるが、個々の竪穴住居によっては、甲斐型土器の出土率を上回ることがある。近年の研究によると、9世紀代の黒色土器は、遺跡によっては信州からの搬入土器である可能性が胎土分析の結果から得られている[5]。また、須玉町大小久保遺跡では、こうした黒色土器を焼いた焼成遺構が検出されている[6]。興味深いのは、黒色土器と共に、甲斐型坏とロクロ整形の土師器甕[7]を合わせて焼いている可能性が高く、その生産構造のあり方が注目される。

黒色土器の生産を考えた場合、その技術的系譜はおそらく須恵器生産との関わりが強く、須恵器生産の消長にも深く関わる土器だと思われる。その生産に関しては、遺跡からの出土状況をみる限り客体的な出土であり、また、大小久保遺跡の状況からみて、土師器生産の中に組み込まれたかたちで成立したと思われる。そして西日本の黒色土器生産のように、土師器生産から独立して固有な展開を示すことはなく、あくまでも在地土器生産の一部門として存続していたものと思われる。

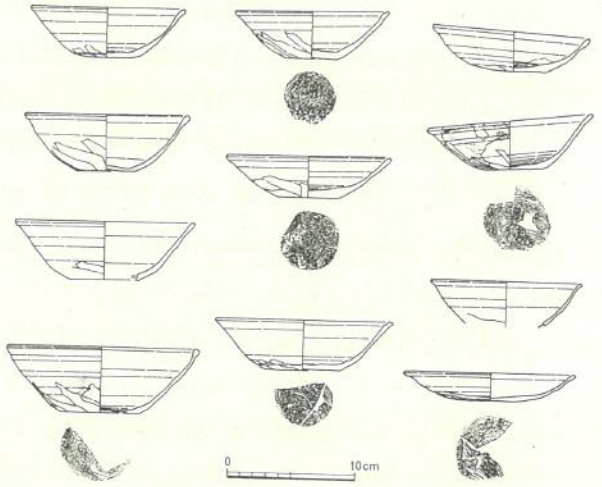
Ⅳ．遺跡にみる土器焼成遺構

次に、10世紀以降の土器（土師器）焼成遺構についてもみてみたい。山梨県内では、当該期における土器の焼成遺構はあまり多くはないが、そのなかで甲府市に所在する大坪遺跡は、古代甲斐国の土師器生産遺跡として知られている。1994年に行われた発掘調査で、10世紀前半代の土師器焼成遺構が1基確認されている[8]。本遺跡は、9世紀前半以降、主に坏や皿といった供膳具形態を中心に生産していたと思われ、煮炊具の生産は行われていないようである。土師器生産に関連する遺構としては他に、9世紀と10世紀代の工房跡と考えられる竪穴建物跡が1軒ずつ確認されている。

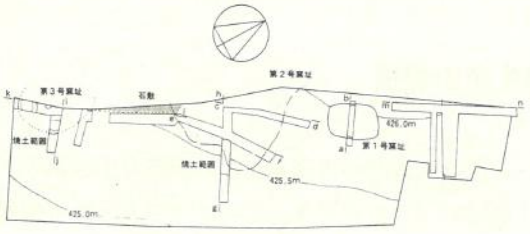
10世紀前半代とされる土師器焼成遺構（96号ピット）は、長軸1.17mを測り、不整楕円形を呈した浅い土坑状のもので、焼土と灰、そして多量の土器片が出土している。残存している土器の状況から、坏と皿の二形態の土器を焼成していたとみらる。大坪遺跡における土器生産は、現段階では、少なくとも10世紀前半代までは押さえられるが、それ以降の状況についてはわかっていない。また、調査範囲が限られた狭い範囲のため、本来どの程度の規模をもつ生産単位なのかもわかっていない。10世紀前半代は、先にみたように、甲斐型土器生産のなかでも、完全な一元的生産体制が確立する重要な時期として捉えられており、大坪遺跡の調査は、当該期の生産体制の一端を垣間見ることができる数少ない例で



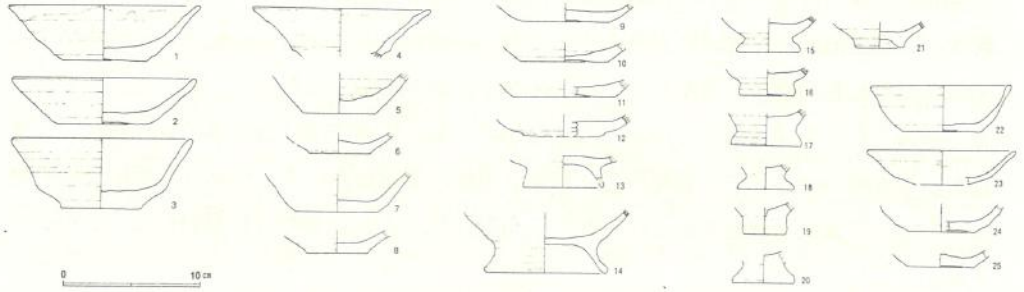
大坪遺跡土師器焼成遺構（96号ピット）



96号ピット出土土器（一部）



荒神山窯跡全体図



荒神山窯跡出土土器（1～21　第2号窯址、22～25　第3窯址）

第3図　大坪遺跡と荒神山窯跡の状況

ある。

一方、山梨市東に所在する荒神山窯跡の発掘調査では、11世紀前半代と12世紀前半代の土器が多量に出土している[9]。本窯跡は、標高477mを測る荒神山の中腹、東端緩斜面上に立

地しており、1986年の発掘調査では、200㎡程度の調査面積であったため、窯本体の調査までには至らなかったが、3基程度の存在が明らかになっている。特に2号窯址では、多量の土器が灰原状に広がり、構造窯であったことを窺わせるスサ入りの粘土塊も出土している。本窯址では、坏と皿の他、甲信地域に主に分布する柱状高台皿も出土しており、12世紀代の焼成遺構としては数少ない例である。3号窯址では、土器の出土量はあまり多くはないが、11世紀前半代の坏が出土している。荒神山窯跡も、大坪遺跡と同様にどの程度の生産規模をもっていたのかは、不明といわざるを得ない。

以上、甲斐型土器生産末期と終焉以後の生産状況を示す大坪遺跡と荒神山窯跡の調査例をみてみたが、もし仮に10世紀代まで大坪遺跡を含む周辺地域で、一元的に土器生産が行われていたとするならば、荒神山窯跡の例は、11世紀以降こうした土器生産の場が、甲斐国内各地域に拡散したことを物語っているのではなかろうか。さらに大坪遺跡では、焼成遺構が窯構造をもたないものであるのに対し、荒神山窯跡では、スサ入りの粘土塊が出土していることから、窯構造をもつ可能性が指摘されている。こうしたことから、甲斐型土器の製作者集団とは異なる、土器製作者自体の変質も窺うことができるのではなかろうか。

Ⅴ．甲斐型土器生産の特質

甲斐国においては、古墳時代後期の鬼高式土器の伝統を引き継ぎ、須恵器の製作技法や形態の影響を受けた土師器がつくられてきた。そしてそれは8世紀初頭における平底盤状坏の成立に繋がり、8世紀中頃の国分寺造営期に甲斐型坏の成立をみた。成立時の坏は、形態的に仏器的性格の強い三彩陶器椀を模倣したものと思われ、この時代における畿内・畿外の金属器指向が甲斐国にも及んでいたことが窺われる。また、一般の人々が使用する土師器にも仏教的要素が及んだことは、仏教が特定の階層ではなく、一般の人々のレベルまで浸透したことを物語っているのではなかろうか。甲斐国では国分寺のみならず、7世紀末の寺本廃寺の存在や、韮崎市宮ノ前第2遺跡の集落址内にみられる、8世紀段階の礎石をもつ仏堂風掘立柱建物跡の存在など、土器以外でも、仏教の普及過程をみることができる。

少々余談になってしまったが、7世紀末から8世紀初頭段階における、土師器への須恵器技術の本格的導入は、律令体制の確立に伴う須恵器生産体制の整備によって生じた結果だと考えられる。須恵器生産体制の整備の他、当該期には先の寺本廃寺への瓦を供給した川田瓦窯跡や、甲斐国分寺僧尼寺に瓦を供給した上土器遺跡、また、供給先は不明だが瓦陶兼業窯である天狗沢瓦窯跡の存在から、古代寺院などの造営に伴い瓦生産体制の整備も行われたと考えられ、須恵器や土師器生産とは別の組織が存在した可能性が高い。

先にも述べたように、須恵器生産と土師器生産は密接な関係にあったと考えられるが、その関係は、橋本久和氏が指摘するように[10]、「須恵器工人と土師器工人の未分化」の状態で曖昧な関係であり、そうした関係が土師器への須恵器技術の流入を促したものと考えられる。そして須恵器生産においては、燃料供給のための山林地確保や、工人の大量動員などの問題もあるが、官主導による十分な運営を行うことができず、広範な窯群を形成することができなかったと考えられる。8世紀中頃以降の土師器生産の活発化は、こうした須恵器生産の不十分さを補完していたと考えられる。

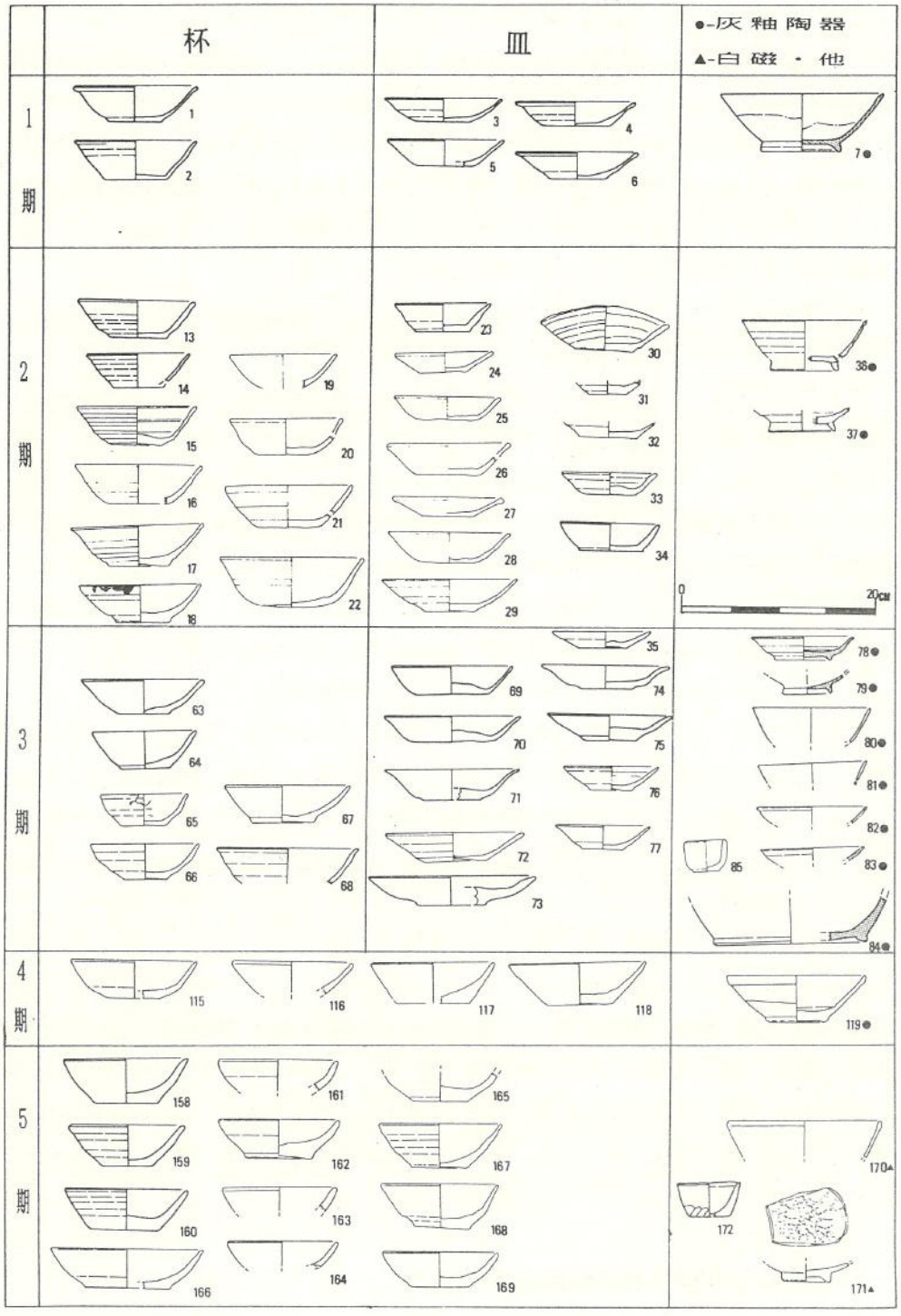
第Ⅰ期から第Ⅲ期までの甲斐型土器は、丁寧なつくりの商品的価値の高い坏形態を中心としている。その高い商品的価値のためか、甲斐国周辺地域の相模、信濃、武蔵などといった国々にも分布している。しかしⅡ期～Ⅲ期の坏は、経済効率を考慮したためか[11]、法量の縮小化や調整方法の省略化が進み、Ⅳ期に至っては、その成立時の美しさを喪失し、機能面が優先してくる。その分布域もほぼ甲斐国内だけになる。一方、新たに皿形態が加わったり、他の器形も独自性を増して、その生産体制は機能形態別に組織化が進んだと思われ、甲斐型土器生産における第一の画期がここにみられる。坏形態にみられた仏教的な要素は、当該期ではみられなくなり、金属器指向も読みとることができない。在地須恵器生産における供膳具形態の生産もこの段階でほぼ行われなくなったと思われ、それに代わって黒色土器生産や、椀・皿を中心とした灰釉陶器の流通も活発化する。

第Ⅶ期になると、器形の種類の淘汰が進み、製作技法の省略化、煮炊具における羽釜の普及など、中世的様相へと進む動向の一端がこの段階で現れ、第二の画期として捉えられる。ここでは、時代のニーズに合わせた器形の選択と、徹底したコストダウンなどといった、須恵器生産の終末期にも似た状況が窺われる。それは食器様式や組成の変化をももたらしたと思われる。

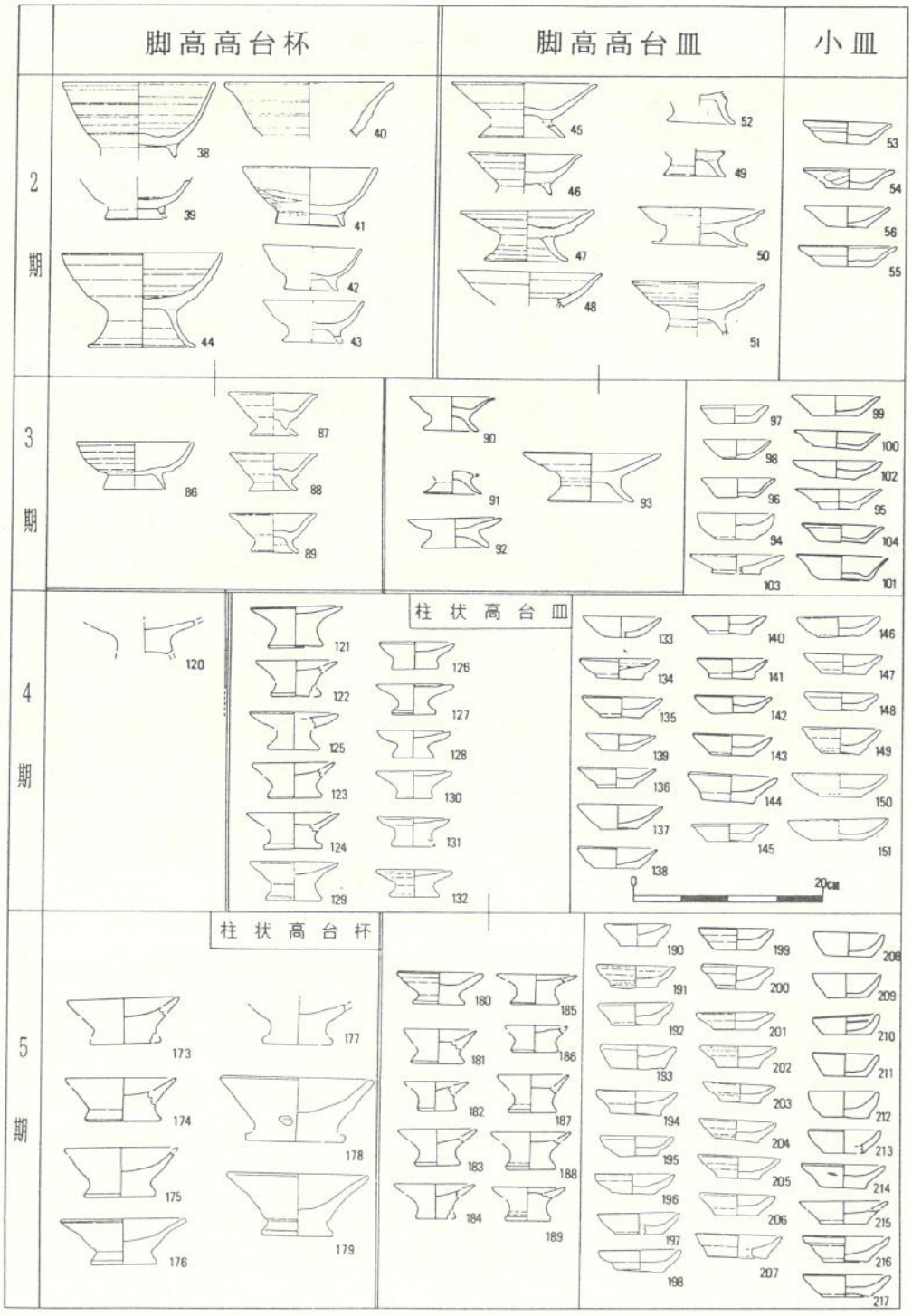
以上のことから、甲斐型土器生産における特質は、須恵器などの異なる土器の製作技術をいち早く取り入れ、商品的価値の高い坏をつくり出したこと。その後、列島規模の経済状況の悪化と律令体制の弛緩に伴い、法量的縮小化や製作技法の省略化などといった経済効率も考慮に入れたと考えられる生産を続ける一方で、多種多様な器形をつくり出し、機能形態別に一元的な生産体制を組織したこと。そしてそれを基軸として、国域もしくは郡域を越えた流通を目指し、時代のニーズに合わせた器形の選択など、独自な展開を示したことであろう。

Ⅵ．甲斐型土器生産終焉期以降の動向

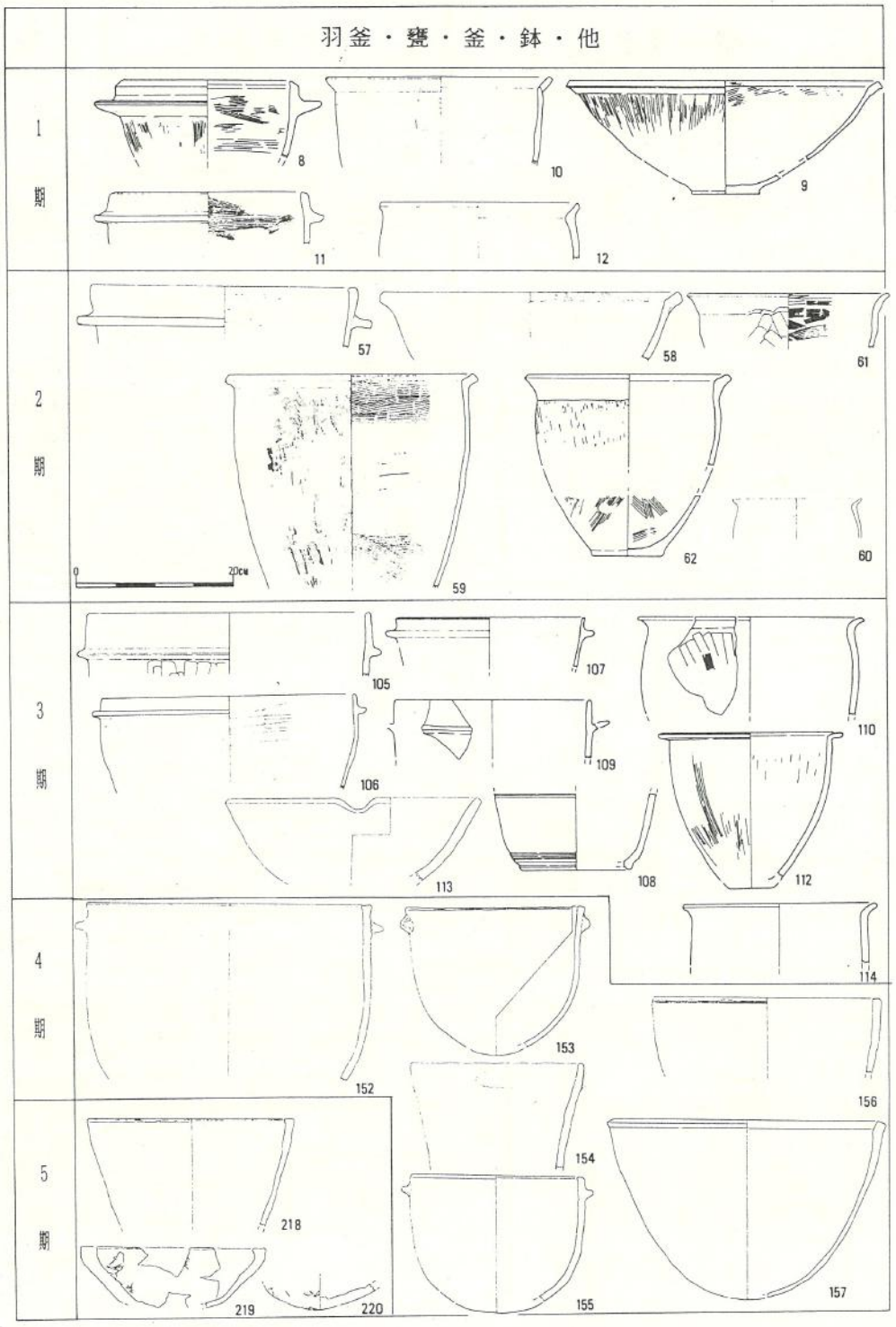
古代末期から中世にかかる土器研究については、神奈川考古同人会主催による、1986年



第４図　古代末期の土器の流れ①（森原明廣氏作成、註13]の文献より転載）



第5図　古代末期の土器の流れ②（森原明廣氏作成、註13]の文献より転載）



第６図　古代末期の土器の流れ③（森原明廣氏作成、註13]の文献より転載）

のシンポジウム「古代末期～中世における在地系土器の諸問題」（以下、86年シンポと称す）において、坂本美夫氏が83年シンポの編年案をさらに再検討し、新たにⅠ期（83年シンポ°時のⅫ期に該当する）～Ⅷ期までの編年案を提示している。[12)]

森原明廣氏は、甲斐型土器の再検討の流れをうけて、古代末期以降の土器編年の検討を行っている。森原氏は、坂本氏の研究成果を踏まえたうえで、土器の形態の類似性を優先した分析を行い、その代表的な器形の組み合わせなどから、第1期から第5期までの5段階の変化があることを指摘している。[13)]森原氏の編年案は（以下、森原編年と称す）、大まかではあるものの、各器形の消長が明確に捉えられている。それによれば、第1期（10世紀中葉～末葉）では、坏、皿、甕、鉢、羽釜があり、第2期（10世紀末～11世紀前葉）では、それらの他に小皿、脚高高台坏と脚高高台皿が加わる。続く第3期（11世紀前葉～後葉）も器形の種類は同じ構成をとり、第4期（11世紀後葉～12世紀前葉）に入ると、皿および脚高高台坏、脚高高台皿がその構成から消える。羽釜も鍔部が形骸化した把手状のものが付く程度となり、もはや羽釜とはよべない形態であるとしている。そしてこの段階から、新たに柱状高台皿が加わり、第5期（12世紀前葉～末葉以前）では、前時期の器形の他に、柱状高台坏が加わるとしている。

森原編年の第1期は、先にふれている第Ⅸ期にあたり、坏・皿ともに甲斐型のイメージは、形態の一部にその名残がみられる程度である。甕や羽釜は、器厚が厚くなるものの、整形方法や鍔部の形態は、前時期から引き継いだ状況となっている。

第2期は、甲斐型土器の完全なる消滅および小皿、脚高高台坏・皿の出現で、一つの画期として捉えられる。そして第4期でも、第2期に出現した脚高高台坏・皿が消滅し、柱状高台皿が出現する。さらに第3期までみられた灰釉陶器の共伴が、第4期ではみられなくなり、変わって白磁の共伴がみられるようになることから、第4期も画期の一つとして捉えることができる。

以上が、甲斐型土器が消滅する古代末期以降の土器変遷の概況である。10世紀以降の甲斐型土器生産は、器形の種類の減少と坏の大小の法量分化が顕在化し、器形の組成は簡素化し、坏は皿状形態に移行する傾向を強める。甲斐型土器終焉後の11世紀前葉には、今までの器形にはみられなかった脚高高台坏・皿の出現をみる。そして12世紀前葉には、前記の器形は消え、新たに柱状高台皿・坏が出現するといった展開を繰り広げている。

このような10世紀末から12世紀前葉までの土器の流れをみると、甲斐型土器の終焉、第1・第2の画期として捉えられる新たな器形の出現はあるが、その状況はかなり漸移的に推移しており、土器生産体制において、ある時期に突発的な大変革が起こったという感じは受けない。甲斐型土器生産において培われた、その生産・流通の基盤を巧みに利用し、中世の土器生産に向けた土器生産体制の緩やかな再編が行われた状況が窺われる。

また、先にふれた荒神山窯跡における12世紀代の坏や柱状高台土器を焼成した遺構は、構造窯の可能性が高く、土器の製作技術ならびに焼成技術は、明らかに須恵器工人の系譜を引くものである。官主導下での須恵器生産から解放された工人達の存在が浮かびあがる。おそらく甲斐型土器終焉以後は、甲斐型土器の系譜を引く工人集団と、須恵器の系譜を引く工人集団という二つの集団が再編され、広域流通を目的とした生産が展開された状況が考えられる。

Ⅶ．甲斐型土器生産終焉の背景

最後に、甲斐型土器生産の終焉の背景には何が存在したのか、その背景について考えてみたい。

甲斐型土器生産が終焉した原因の一つとして考えられるのは、需要が供給を上回らなくなったことが考えられる。つまり端的にいえば、土器が売れなくなったということである。では、なぜ売れなくなったのか。土器を動産的に価値があるものとした場合、需要側の大部分は一般農民層であるが、甲斐型土器は9世紀代後半代にはすでに、一般農民層の底辺まで普及しており、当該期以降、製作する器形の種類を徐々に減らし、製作技法の簡略化などによって大量生産を行ってきた。

ところが須恵器の消滅と共に出現した搬入土器である灰釉陶器など動産的価値の高い土器も、10世紀代に入っての流通の拡大によって、一般農民層にも比較的入手しやすい環境が整ってきたと考えられる。こうした動産的価値の高い他の土器と競合するなかで甲斐型土器は、器体部内面に束状暗文や渦巻状暗文を施した内面黒色土器を生産して対抗するものの、需要側のニーズには応えられなかった。そして坏・皿といった他の器形の大量生産に伴う土器自体の機能鈍化は歪めなく、必然的に甲斐型土器の動産的価値が低下していったものと思われる。しかも旧国単位でしか流通圏をもたない甲斐型土器にとっては、これ以上の販路の拡大は望めず、その生産が頭打ち状態に陥り、生産の行き詰まりを招いたのではなかろうか。

また、供膳具形態の木製品と漆器の普及や煮炊具形態の鉄鍋などといった、土器とは素材の異なる器の普及も考えられる。漆器については、11世紀後半になると、柿渋を用いた渋下地法による漆器生産が開始され、安価な漆器が普及するという指摘が、四柳嘉章氏の近年の研究によってされている[14]。技術変革前の10世紀後半代では、漆器などはまだ高価な存在であったと思われるが、その潜在的需要は、富豪層を中心にかなりあったと推察できる。こうした他の土器や素材の異なる器の普及も、甲斐型土器の器形の種類の減少と生産の縮小を導く一つの要因となったと思われる。

もう一つ考えられるのは、土師器製作者集団自体の内的解体および崩壊が考えられる。土師器生産は、須恵器生産とは異なり、小規模経営で、家内労働的側面が強かったと思われる。それは大坪遺跡で確認された土師器生産関連遺構の状況からも読みとれると思われる。その工人層は専業的に土師器生産を行っているといっても、基本的にはもともと農業に従事している農民であり、土師器生産は恒常的ではなく、農閑期を中心に行っていたと考えられる。そしてこうした生産規模の工人層を支配していたのは実質的には、国司や郡司レベルの階層ではなく、おそらく私出挙を中心に小農民から収奪を繰り返し私富の蓄積を高めた在地の有力層（富豪層）だったと思われるが、工人層もまたその収奪の対象となっていたと思われる。こうした工人層の中には、富豪層による、農業と土器生産という二重の収奪に耐えきれず、自立できないまま没落していくものも数多くあったと思われ、そのために工人集団内での内的解体および崩壊が進んだことが推察できる。工人層の解体と崩壊に伴い、数少ない人数で土器生産にあたるために、器形の種類を減らし、製作技法の簡略化で作業効率の向上を図るものの、以前の供給量は賄いきれず、自滅していくといったことも考えられる。

この他、10世紀後半以降の社会機構自体の変化も考えられる。これは、集落の消長という視点からであるが、10世紀前半代まで集落の営まれていた場所が、10世紀後半から11世紀初頭を境として集落が営まれなくなり、その後は水田などの耕地として利用され、二度と集落は営まれることはないという、いわゆる居住地から耕地への地目転換が全国的にみられる。当該期は、地形環境の変化による土地の平坦化や安定化によって[15]、土地への働きかけが前代より増して活発化した時期だと思われる。こうした大規模事業の推進には、先述の在地の有力層（富豪層）が深く関与し、古代以来成長を続け、在地領主層へと変貌を遂げる彼らの性格の変化が、在地における土師器の生産・流通という、一手工業部門をも巻き込んだ社会機構の変革が当該期に起こったことが容易に想像できる。

以上のような原因が考えられるが、いずれも推測の域をでない。土師器生産の変質は、10世紀後半から11世紀代における、中世に向けた社会機構の変革の中で起こった現象であることは容易に想像できるものの、その決定的な原因は、一面的ではなく、前記のような原因が複雑に絡み合って引き起こされた変質であろう。

Ⅷ. おわりに

8世紀から10世紀にわたる甲斐型土器生産をめぐって、古代から中世への移行期の状況を素描してきた。古代的土器様相をもつ甲斐型土器の終焉が、イコール古代の終焉と短絡的結び付くものではないと思うが、古代から中世への移行期の混沌とした状況が少なから

ず垣間見ることができたのではなかろうか。こうした状況を古代末期として捉えるのか、それとも中世の開始と捉えるのかは今後論議を深めていかなければならないが、これは中世の考古資料からの検討も必要となってこよう。

また、土器からの視点だけでなく、集落・耕地開発などの他方面からも合わせて検討を行う必要があることは言うまでもない。甲斐国の場合、甲斐型土器の終焉期が、集落の構造の転換期と合致する場合が多く、ここに在地社会全体の構造的転換が読みとれるからである。しかしここでも中世の集落に対する予察的な指摘はあっても、その考古学的データは少なく、実態は解明されていないのが現状である。

政治・経済・文化の変化は、三位一体で推移することが多く、特に政治と経済は密接な関係をもって推移することは言うまでもない。土器生産や集落の出現・消滅もこうした動向と密接な関わりのなかで捉えられるのである。今までみてきたとおり、10世紀後半から11世紀代は、古代的世界から中世的世界の形成に向けて、極めて重要な時期であると共に、重要な画期であるといえよう。

平安時代の初期に一つの地域色の強い土器として成立した甲斐型土器は、その後独自の発展を遂げ、甲斐国を代表する土器として存在した。一小地域の土器ではあるが、古代から中世形成期にかけての土器生産を含めた、社会経済機構の変革を想定でき得る土器でもある。小稿では、甲斐型土器生産の時間的推移のなかから、中世の土器生産への展望や問題点および課題を提示しようと試みたものの、筆者の力量不足から、こうしたことを論じることができず、各論に終始してしまった。深く反省する次第である。

最後になったが、小稿を草するにあたって、帝京大学山梨文化財研究所定例研究発表会で多くの所員からご教示をいただき、また、一宮町教育委員会の瀬田正明氏からもご教示をいただいた。深く感謝申し上げる次第である。

（帝京大学山梨文化財研究所）

〔追記〕

小稿では、甲斐型土器とそれ以降の土器を「土師器」もしくは単に「土器」とよんできた。周知のとおり、関東では、奈良・平安時代の土器のよび方として「土師器」「ロクロ土師器」「土師質土器」「須恵系土師質土器」などとよばれており、名称の統一をみていない。甲斐型土器は、各名称の土器のもつ概念にも、部分的には合致するものの、山梨県内ではまだこうした論議が深まっていない。そのため混乱を避けるため小稿では、従来どおり山梨県内で認識され使用されている「土師器」の名称を使用した。

また、甲斐型土器以降の土器については、山梨県内でも「土師質土器」の名称が一般的となっているが、その概念については明確にされていない。しかし、甲斐型土器以後の土

器は、形態的には甲斐型土器から漸移的な変化を示すが、胎土や色調においては明らかに異なっている。焼成方法においても荒神山窯跡の例のように、甲斐型土器以後の土器は、構造窯を使用している可能性があり、甲斐型土器の焼成方法とは異なっている可能性が高い。よって土師器と須恵器の中間的な意味合いをもつ土器として「土師質土器」という名称を使用した方がいいと思われる。長くなってしまったが、名称の問題については、以上のようである。

註

1）坂本美夫・末木健・堀内真「甲斐地域」　神奈川考古第14号（シンポジウム　奈良・平安時代の諸問題）　1983　38－46頁

2）甲斐型土器研究グループ『甲斐型土器－その編年と年代－』　山梨県考古学協会　1992

3）この鉢には、片口の付く坏の胎土および形態を呈するものと、甕の胎土で擂鉢状の形態を呈するものがあり、便宜的に前者を坏系鉢、後者を甕系鉢とよんでいる。

4）前掲註2）

5）三辻利一「健康村遺跡出土の信州系土師器の蛍光X線分析」『山梨県北巨摩郡長坂町健康村遺跡－（仮称）東京都新宿区立区民健康村建設事業に伴う発掘調査報告書－』　新宿区区民健康村遺跡調査団　1994　129－142頁

6）須玉町教育委員会『大小久保遺跡』　須玉町埋蔵文化財調査報告第1集　1983

7）この甕は成形が粘土紐巻き上げで、器体部の上半と下半をつくり分け接合している。調整はタタキメ、回転（ロクロ）ナデ、カキメ、ヘラケズリなどがみられる。形態には甕の他、小型甕、鉢、甑がある。その分布域は山梨県内でも、北巨摩郡地域、中巨摩郡西部地域に偏在し、黒色土器同様、客体的な存在である。その系譜など詳しい研究については、以下の論文を参照されたい。

保坂康夫「山梨県下における古代前半のロクロ整形土師器甕をめぐって」　山梨県考古学協会誌第2号　1988　60－89頁

8）本遺跡は、甲府市東部の甲府市桜井町字角田に所在し、1994年7月～10月にかけて甲府市遺跡調査会によって調査された遺跡で、筆者が調査を担当している。県内では早くから土師器生産遺跡として知られ、過去2度にわたって調査が実施されている。今回の調査で初めて生産遺構が検出された。現在、本報告書刊行のため整理作業中であり、刊行は平成8年3月の予定である。

9）山梨市教育委員会『荒神山窯跡発掘調査報告書』　1987

10）橋本久和「西日本における古代から中世への転換期」　中世土器研究序論　真陽社　1992　19－31頁

11）西　弘海『土器様式の成立とその背景』　真陽社　1986
この中で西氏は、8世紀後半代に現れる法量縮小化の傾向は「おそらく班田農民の浮浪、逃亡となって現れた律令制国家のゆるやかな弛緩の中で、しだいに顕著になりつつあったインフレーションの進行とそれに伴う経済水準の低下を反映するもの」と推察している。

12）坂本美夫「甲斐国における古代末期の土器様相」　神奈川考古第21号　（シンポジウム　古代末期～中世における在地系土器の諸問題）　1986　130－139頁

13）森原明廣「山梨県地域における古代末期の土器様相」　丘陵 第14号　1994　33－50頁

14）四柳嘉章「古代～近世漆器の変遷と塗装技術」　石川考古学研究会々誌　第34号　1991　49－80頁

15）近年、ジオアーケオロジーの観点から自然環境と人間活動との関わりを明らかにするうえで、土地利用や土地開発、災害について考える地形環境分析が積極的に行われるようになった。山梨県内においては韮崎市宮ノ前遺跡の調査時に同分析を実施している。
高橋　学「宮ノ前遺跡の地形環境分析」『宮ノ前遺跡　本文編』　韮崎市遺跡調査会他　1992　260－267頁